

ボランティア部門 受賞者

玉井 義臣

あしなが運動創始者

1,100億円以上を募金活動で集め、 遺児およそ11万人の進学を支援



故 玉井 義臣
Yoshiomi Tamai

あしなが運動創始者

1935年、貧しい家庭の10人きょうだいの末っ子として大阪に生まれる。大学に行けなかったきょうだいたちの支援を得て、滋賀大学経済学部に入學。卒業後、大商証券に就職するも1年で退職する。その後、経済ジャーナリストとして生計を維持。1964年に母親を交通事故で亡くす。交通遺児の悲惨な現実に私憤を抱き、日本初の交通評論家として活動を開始する。1969年には「財団法人交通遺児育英会」を設立し、交通遺児の進学支援を開始。1993年には、災害・病気・自死などの原因で残された子らの支援のために「あしなが育英会」を設立し、副会長に就任。1998年、会長に就任し、現在は、サブ・サハラ地域（サハラ砂漠以南）の遺児を毎年選抜・支援し、「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」を展開している。

※玉井氏は2025年7月5日にご逝去されました。故人の業績を称え、追悼の意を表します。

推薦者 | 濱口道成 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 先進的研究開発戦略センター センター長

お母ちゃんの死は無駄にしない

何らかの理由で親を亡くした子が、たちまち直面するのが経済的苦境だ。こうした遺児たちに、1960年代から手を差し伸べてきたのが玉井義臣氏である。

玉井氏は貧しい家庭の末っ子として生をうける。他のきょうだいは、小学4年生を終えると丁稚などに出た。しかし長兄が、「おまえだけは進学させたる」とお金を出し合って進学を後押ししてくれた。大学卒業後は非正規の証券外務員として働くも、1年で辞めて兜町の経済ジャーナリストとして糊口をしのぐ。そんな無頼な生活を送る中で飛び込んできたのが、母親の交通事故の知らせである。当時は国内に脳外科の専門医がごく少数しかおらず、適切な治療が受けられないまま、35日後に息を引き取った。「お母ちゃんの死は絶対に無駄にしない」。そう誓った玉井氏は、日本初の交通評論家として、救急医療体制や損害賠償、交通事故犠牲者の實際を次々と発信。当時、加害者に支払い能力がない場合はまさに“ひかれ損”で、事実、母の“命の値段”はたった100万円であった。そんな最中、『桂小金治アフタヌーンショー』から交通事故防止キャンペーンのコメンテーターとして出演依頼を受ける。これが氏の人生を大きく変えていくことになる。

“人ったらし”のアイディアマン

番組には政治家や官僚、財界人などを招いて議論をし、犠牲者の実態把握調査や交通事故防止の施策について視聴者の前で言質をとっていった。1967年、姉を交通事故で亡くした岡嶋信治氏との出会いが訪れる。「交通遺児を励まし、進学を支援したい」という岡嶋青年の鬼気迫る申し出に、「一緒にやろう」と玉井氏は思わず答えていた。遺児を進学させるにはお金が必要である。1968年、アフタヌーンショーの中で『天国にいるおと



1967年10月22日、東京・数寄屋橋の交差点(写真)と池袋駅東口で、「交通遺児を励ます会」の若者十数人とともに初めての募金活動を行った。

育英会」が設立される。資金集めには常に苦労が伴ったが、街頭募金活動や国会への働きかけ、番組内での自動車業界への寄付依頼など、いずれの場面でも玉井氏の“人ったらし”な性格が功を奏し、交通遺児2万7,000人*の進学に手を差し伸べるに至った。

その後、親を亡くして困っているのは交通遺児だけではないと、あしながさん**の援助で進学できた交通遺児たちが「恩返し運動」として「災害遺児の会」を創設する。その後、災害遺児により「病気遺児の会」が作られ、両会を統合する形で、1993年に「あしなが育英会」が誕生する。ここでも玉井氏のアイディアマンぶりは抜きん出ており、全国6カ所から東京を目指して歩くキャラバン隊を組織し、延べ6,000キロを踏破する。この活動で「あしなが育英会」の存在は一気に知られることとなった。

玉井氏は生前、現会長の村田治氏に「遺児でも、どんどん大学院にも行かせるんやで」と頼んだのだとか。母を亡くしたときの悔しさが、11万人の遺児の未来に灯をともし続けている。



毎年、春と秋に行われる「あしなが学生募金」。玉井氏曰く「あしながは教育団体」。人前で大きな声で募金を呼びかける活動は、人としての学びの場ともなっている。

*1 1988年当時の人数 *2 遺児たちを支援してくれる人のこと